フォルム NO.329 Since 1956
日文教育資料［図画工作・美術］

形 forme

特集

ひらいて むすんで

みんなでつくる
子どもの未来

本資料は、一般社団法人教科書協会
「教科書発行者行動規範」に則り、
配布を許可されているものです。

日文の教科書情報
詳しくはWebへ!
日文 検索

未来をになう子どもたちへ
日本文教出版

※本冊子掲載QRコードのリンク先コンテンツは予告なく変更または
削除する場合があります。
※QRコードは、株式会社デンソーウェーブの登録商標です。

この冊子は、以下の内容解説資料として扱われます。
令和３年(2021年)度版　中学校美術科
令和４年(2022年)度版　高等学校芸術科美術Ⅰ

はじめに

『形 forme』は広く現代社会の要求に応える美術教育の理論と実践の紹介を目的として一九五六年に創刊されました。以来六〇年を超える長きにわたって、美術教育に寄り添って刊行を続けています。

『形 forme』という書名は造形と人間形成をシンボライズしたものです。子どもたちのための美術教育に取り組んでおられる先生方、美術や造形にかかわるすべての方々、そして保護者の皆様のために、これからも、よりよい美術教育を目指す道標となる内容を目指していきます。

Index No.329

② **特集 ひらいて むすんで**
みんなでつくる子どもの未来
・巻頭インタビュー
学校をひらいて 地域とむすんで
学校が希望を紡ぐ場所になるために
東京大学大学院教育学研究科 教授 牧野 篤
・各地での活動リポート
学びをひらいて 人をむすんで

⑬ **ABC PICK UP**
阿部宏行

⑭ **村上センセイの 教科書利用のススメ**
｜第7回｜ 熊本県 熊本市立京陵中学校 伊藤亜希子

⑯ **形から用途を考えよう「鉋（かんな）」**

⑱ **まず見る**
｜第32回｜ 生まれた面をみる 成相 肇

⑳ **児童作品解説 私の見方**
市川寛也

表紙について

「学び」は、人とつながり、影響を受け合うことで見方や考え方の幅が広がり、深化します。学校と地域・企業、子どもと大人が互いに手を広げ、手を取り合って学びや喜びの輪を広げていけるとよいですよね。

アートディレクション：清水 一（東京ピンポン）
編集・ディレクション：山本武義（東京ピンポン）
デザイン：東京ピンポン

ページ下部に、それぞれのコーナーと校種の関連性の強さを表示しています。各企画は小・中・高全ての校種に関連がありますが、特に関連の強い校種を大きくしています。

例：｜小｜中｜高｜ 特に小学校に関連の強いコーナーを表します。

特集 ひらいて むすんで

みんなでつくる 子どもの未来

各地での活動リポート

学校と社会 みんなで子どもを育てる p.6

風を受け、まちにはためく子どもたちの思い
木更津みなとぐちアートプロジェクト2022 ミナート（千葉県木更津市）

地域に眠る宝の山
（東京都八王子市）

作品から子どもの声を聞く
風土記の丘の美術展（福島県郡山市）

人と資源と思いが循環するまちづくり
MEGURU STATION®（兵庫県神戸市・福岡県大刀洗町など）

「する・される」でなく、「そばにいるよ」という関係 p.9

まちを知り、プロの技を知り、まちに戻す
ちびっこうべ（兵庫県神戸市）

面白い大人がまちの魅力 p.10

楽しむ力は、巻き込む力
東雲地区商店会（広島県広島市）

行政ー企業ー大学がつながるその中心に子どもがいる
むなかた子ども大学（福岡県宗像市）

ワクワクを循環させる p.11

アイデアとイメージが混ざり合い響き合う
阿佐谷ジャズストリート（東京都杉並区）

「知ってもらう」から始まるまちづくり
「こーばへ行こう!」（大阪府東大阪市）

学校をひらいて 地域とむすんで

巻頭インタビュー

学校が希望を紡ぐ場所になるために

東京大学大学院教育学研究科 教授 牧野 篤先生

学習指導要領で掲げられた「開かれた教育課程」。コミュニティスクールの努力義務。大切さは理解できても、何から取り組めばよいか分からないと尻込みする先生もいることでしょう。なぜ今、学校をひらき、地域とつながる必要があるのでしょうか。社会教育・生涯学習を専門とし、全国で地域コミュニティの活性化プロジェクトに携わっている牧野篤先生にお話を聞きました。

学校と社会 みんなで子どもを育てる

―学校と地域が結びついていこうという動きが進んでいますね。

学校は今、いろんなことを抱え込んでしまっています。だから地域もいっしょに子どもを引き受けていこうということなんですが、先生方は授業や校務分掌で忙しいので、「地域も」となると負担に感じられるようです。

だけど、地域に出て活動していく中で子どもたちは変わっていきます。すると、親も先生も変わっていき、地域といい関係ができていくんです。

地域は子どもと関わりたい

例えば、岐阜市では教育委員会が高齢者の活躍の場とコミュニティスクールを絡めたいということで、モデル校となった学校と私たちは関わったのですが、当初、校長先生以外はあまり乗り気ではなくて……。

地元の人たちはそれまでもいろんな形で子どもたちと関わろうとしていましたが、学校は敷居が高くて入れなかったそうです。それで空き教室を地域に開放してもらうと、子どもたちが「ハートルーム」と名付けてくれました。すると、遊びに来る子どもたちと地元の人が仲良くなってクラブができて、いっしょに給食を食べたり学校菜園でスイカを植えたり、活発に活動できるようになったんですね。

互いの顔を思い浮かべうれしくなる

すごいなと思うこともありました。コロナ禍でマスクが足りなくなったとき、最初にハートルームで活動した子どもたちが、もう中学生なんですが、布マスクを縫って地元の高齢者に届けたんです。自分も困っていたけど、おじいちゃんやおばあちゃんの顔がふと浮かんで、何かしたくて、テレビで布マスクのつくり方を見て「これなら」と思ってつくったら、みんなが喜んでくれてうれしかった。そう言うんです。

高齢者の方々も感激されて、今度は地元の人たちに声をかけてハートルームで布マスクを縫って、全校児童に

（次ページへつづく）

配ってくださって。縫っている最中に子どもたちの顔が浮かんでうれしかったとみんな言うんですよね。そういう関係を築く力はだれにでもあるんです。

「する・される」でなく、「そばにいるよ」という関係

先生方もすごく感動して「うちの子どもたち、すごい力があったんだね」って言い始めるわけですね。

安心感が意欲を高める

ハートルームで地域の人と活動している子どもたちは意欲が高まって、一生懸命勉強するようになって学力が向上したといわれます。特別支援学級の子どもたちもいるのですが、すごく安定したとみなさんおっしゃっていて。先生と親子の関係だけじゃなくて、地域の人が関わって「だいじょうぶだよ」ってみんなが言ってくれる関係が、子どもの安心感につながるんですよね。

やはり学校では子どもたちは緊張していて「失敗したらダメだ」と思い込んでいる。だけど、ハートルームに行くと「失敗したってだいじょうぶだよ」って言ってくれる地元の人たちがいる。みなさん、いろいろ失敗してきてますからね、大人ですから(笑)。それで、子どもたちも救われているところがありますよね。

ただ話を聞き続けることから

スタートから三年くらいで学校全体でハートルームに関わってもらえるようになりました。三年はかかります。

人間って、既成概念にとらわれてなかなか変われない。変化を自分の言葉で解釈できるようにならないと動けないんですね。こちらが話を聞き続けているうちに、本人が自分の言っている言葉に気づき始めて、つらいと言いながらも「でも、これを自分はやりたかったんだ」って思い始めると動くんです。よかれと思って先回りしてしまうと「する・される」の関係が生まれ、される側はどんどん受け身になって、結果的に共倒れになることもよくあります。だから「いっしょにいるよ」と言い続け、聞き続ける関係から始めるんです。

面白い大人がまちの魅力

—学校の外で子どもに経験してほしいことはあるでしょうか。

「大人って面白い」っていうことを知ってもらいたいです。

私が学生に「この間、君のふるさとに行ってきたよ」と言うと、話が終わる前に「何もないですよね」って言い始めます。地元がつまらないと思ってるんですよね。

七割が地元に帰りたいまち

島根県益田市と関わって六年くらい経ちます。市内に大学がないので、進学する子どもは高校を卒業すると出ていっちゃう。地元について子どもに聞いてみると、五割近くが「安心して相談できる大人がいない」「魅力的な大人がいない」と答えていたんです。

これではいけないと、大人が中学生や高校生に自分の人生を語るという活動を始めました。大人が一生懸命に語ると、高校生は自分の将来を考えているのでいろいろ質問し、自分のことを語り出す。するとまた大人が語るという循環ができて。そのうち「面白い大人がいっぱいいる」って子どもたちが言い始めました。

今も八割の子どもは出ていきますが、七割以上が「帰ってきたい」って言い始めています。自分の将来を考えたときに地元のある人の顔が頭に浮かぶって言う子もいて。「これをやりたいから、あの人に相談しよう」って。

—場所ではなく、人なんですね。

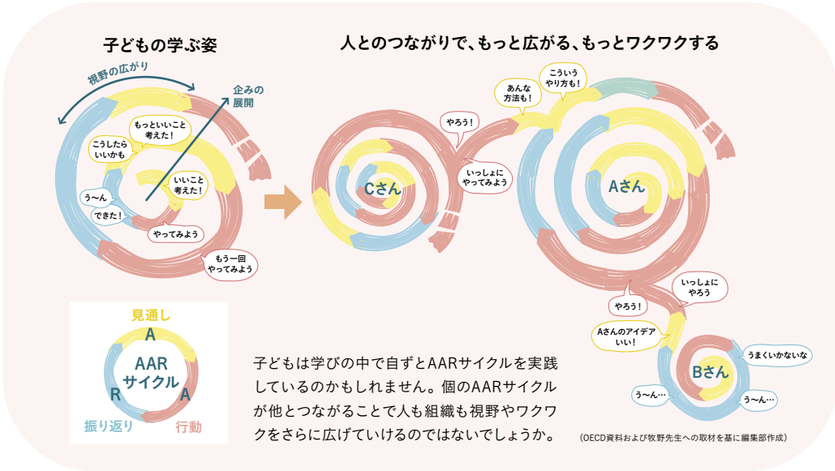
人です。地域の人と関わって自尊感情が高くなってくると、やっぱり子どもは変わっていくんですね。

ワクワクを循環させる

—人とのつながりの中で自分の進路が定まってくるのでしょうか。

それは決して固いものではなくて、柔軟に組み替わるものです。自分がやりたいことがどんどん見付かって、次から次へと新しい自分ができてくるという感覚を楽しんでいるというところがありますよね。

OECDが言うところのAARサイクルです。



AARと図工の学び

最初のAはanticipationで見通しと訳しますが、「いいことがやってきそう」ってちょっとワクワクしちゃう感じです。そして次のA、action(行動)があって、Rつまりreflection(振り返り)がある。

学校の場合、どうしても振り返りに評価が入ってしまいますが、まちづくりでは、動き始めながら振り返りをしています。うまくいけば次のワクワクが起こりますし、うまくいかなくても別に平気だよっていう感じで次のことを考えればいいんです。

—図工の「造形遊び」という活動と似ていますね。

私も図工ってそういうものだと思ってはいたんですね。目的を決めて設計してということではなくて、イメージはあるけど、つくっていくうちに新たなイメージが出てきて変わっていくところを楽しむような感じで進む。そこが造形の魅力なんでしょうね。

自分の人生をつくるのもそうですよね。失敗っていうものなんてなくて、目的は達成しなくてはいけないものではなくて、常に組み替えればいい。形はその都度決まってくるし、でき上がったものもまた違うものに変えていけばいい、そういう感じだと思います。

一人で抱え込まないで社会を信じて

—牧野先生は「学校を希望を紡ぐ場所に」と言われています。

逆に言うと、もう学校しか残っていないという感覚です。「最後のとりで」というか。

今は家庭が多様化し、本当にぎりぎりのところで生活されている方も多く、ヤングケアラーが相当数いることも分かってきています。

子どもたちが救われるのは学校しかない。ここが崩れてしまうと、居場所がなくなってしまう子どもたちがたくさんいる。だからこそ、学校に行けば自分の将来について希望をもって生きられるんだ、そう思える場所になってほしいんです。

そういう意味でも、地域がちゃんと責任を引き受けて、学校といい関係をつくっていって、子どもが地域と学校を行き来しながら育っていくっていう社会をつくっていかないと、社会の底が抜けちゃうんじゃないかって心配しているんです。

先生方はたいへんかもしれませんが、一人で全部抱えるんじゃなくて、みんなといっしょになって子どもを育てるんだというふうになれば。親もそうですよね。

「社会を信じて任せてほしい」そういう気持ちです。やっぱり「いっしょになって」という関係がつくれればいいなと思います。

牧野 篤(まきの・あつし)
東京大学大学院教育学研究科　教授

愛知県生まれ。
名古屋大学大学院教育学研究科博士課程修了。博士(教育学)。名古屋大学助教授・教授を経て、2008年より現職。中央教育審議会生涯学習分科会委員・副分科会長。中央教育審議会第4期教育振興基本計画部会委員。専門の研究領域は社会教育学・生涯学習論。『発達する自己の虚構—教育を可能とする概念をとらえ返す—』ほか著書多数。

撮影:池ノ谷侑花(ゆかい)

ここでは、地域の施設やイベントと学校との連携、地域ぐるみで子どもを育てていく活動など、
全国で取り組まれている事例をご紹介します。
「なんだか素敵、楽しそう」と思えれば、学びを「ひらいて むすんで」いく第一歩になるのではないでしょうか。

学びをひらいて 人をむすんで

各地での活動リポート

学校と社会 みんなで子どもを育てる

千葉県 木更津市

風を受け、まちにはためく子どもたちの思い

〚木更津みなとぐちアートプロジェクト2022 ミナート〛

2022年、市政施行80周年を迎えた木更津市では、「木更津みなとぐちアートプロジェクト2022ミナート」が開催されました。その柱の一つは出前ワークショップ。参加者の中心は、市政100周年となる20年後には社会を担うことになる子どもたちです。市内小中高校の11校が参加。アーティストとの交流によって、子どもたちは多様な価値観に触れることになります。

木更津市立鎌足小学校で行われたのは、「旗をつくろう！～街の元気と未来をつなぐ旗～」という活動。アーティストで千葉大学教授の加藤修先生と学生たちのファシリテートのもと、子どもたちは大きな布に自分のシルエットをかたどり、思いのままに色や模様を付けていきました。作品は保護者による縫製作業の協力のもと旗となり、駅前商店街のアーケードに展示された様子は、子どもたち一人ひとりの躍動感であふれていました。

このような取り組みができたのは、保護者をはじめ多くの大人たちの支えがあってこそ。子どもたちを支える私たち大人が力を合わせることで、子どもたちは地域を愛し、まちの未来を担っていく存在になっていくのではないでしょうか。

POINT

アートイベント目白押しの昨今。多くは地域に根差したものであり、学校教育との連携を望んでいます。学校だけでは取り組めない活動ができるだけでなく、イベントに参加したということが、子どもたちのまちへの思いを育み、地域に生きる自身の存在も実感させられるのではないでしょうか。

▲飾られた旗を見る子どもたちがとてもうれしそう。

▼大学生との交流も貴重な機会。

▶一人ひとりの個性があふれる作品ができた。

撮影：大関雄次郎

東京都 八王子市

地域に眠る宝の山

子どもたちのために材料を探す先生はたくさんいます。八王子市立船田小学校の橋田朋憲先生もその一人。材料集めに余念がありません。子どもたちに伝え、学校だよりで呼びかけ、建築現場でいい角材を見付けたら「ください」と言ってみる。そんな中、先生同士の口コミで市内に工場を構える杉本プリーツを知り、すぐに連絡しました。

杉本プリーツは、機械や手折りでさまざまなプリーツ形状の生地や衣服をつくっています。機械用プリーツ加工紙は一日2～6ロール使われ、再利用できないため廃材に。代表取締役の山浦未来さんは常々「もったいない」と思っていました。そこで「だれかもらってくれませんか」とSNSで呼びかけたところ、市内の小学校から図工の研究会で使いたいとの連絡が。研究会に参加した先生同士の口コミで廃材をもらいに来る人が増えたそうです。「先生たちは『タダですみません』って申し訳なさそうにするけど、こちらとしては感謝しかないんです。捨てるのもたいへんだから。必要な人がいるならどんどん紹介してあげてって気持ちです」（山浦さん）。

「プリーツ紙の圧倒的な量感は子どもの活動や発想を広げます。今度は手折りのプリーツ型を子どもたちに見せて、こんなすごい技術をもっている人が同じ地域にいるっていうことも伝えたいです」（橋田先生）。

企業にとってはただのゴミも、図工の材料となる「宝の山」かもしれません。積極的に情報交換したり、思い切って声をかけたりすると、互いにハッピーな縁になることもあるようです。

POINT

材料集めに苦労している先生。廃材の処理に頭を悩ましている企業やお店。自ら情報発信したり、思い切って声をかけたりすると地域での素敵なご縁に出会えるかもしれません。

◀プリーツ紙でテントをつくる活動では子どもも大喜び（船田小学校）

▶手折りのプリーツ型紙

▲160cm×400mのプリーツ加工用専用紙。2週間ほどで廃材置き場がいっぱいに（左：服のそでにプリーツ加工を施している様子、右：廃材をもらいに来た橋田先生〈写真左〉と山浦さん〈写真右〉）。

福島県
郡山市

作品から子どもの声を聞く

風土記の丘の美術展

▲展示会場入り口の様子

郡山市立美術館の「風土記の丘の美術展*1」は市内小学生による作品展で、作品がよりよく見えるよう、学芸員が作品にふさわしい場所を考え工夫をこらして展示します。

一つひとつの作品を大切に展示することを心がけていますが、来場者に作品を丁寧に見てもらったり、自分の作品を見に来た子どもから「〇〇学校の〇〇さんの作品、すごかった!」とか、たまたま来館した人から「子どもの感性に触れてパワーをもらった」など感嘆の声が届くとうれしくなるそうです。一方で、子どもの作品は震災やコロナ禍など世相を反映します。「作品から『この子、いま苦しいだろうな』と感じることがあります。子どもの気持ちや声をちゃんと受け止める責任が大人にはあるということを伝える場でもあります」(学芸員の永山多貴子さん)。

この美術展は、美術館が学校とどう連携できるか模索する中で、郡山市小学校造形教育研究会との共催という形で始まりました。学校での図工教育の研究という観点から、題材研究に役立ててほしいという願いもあり、「コンクールではないこと」「図工の授業でつくった作品であること」を出品の留意事項*2とし、先生たちからも理解を得ているそうです。

スタートから20年。美術展を機に小学校の先生たちとの連携はより強固なものになっています。そして、美術展によって、大人は地域で郡山の子どもたちを見守っていくという気持ちを、子どもたちは自分が大事にされているという実感をもつことにつながっていくのでしょう。

▲一つひとつの作品をじっくりと見る来場者も多い。

POINT

作品を大事に展示すると、見る人の中に大事に扱おうという気持ちが芽生え、ひいては作品の向こうにある子どもの姿がリアリティをもって立ち上がり、地域で見守っていこうとする思いにつながります。

兵庫県神戸市
福岡県大刀洗町
など

人と資源と思いが循環するまちづくり

MEGURU STATION®

「すべての資源をゴミにしない社会にしたいという思いが最初にありました。実現するには、きれいな状態で分別回収する必要がありますが、継続的に回収場所まで持ってきてくれるかが課題でした。なら、持っていきたくなる場所をつくればいい。その発想の転換が第一歩でした」(活動母体であるアミタホールディングス㈱の蝦名裕一郎さん)。

「孤独も環境問題も『つながり』が断絶することに起因する」と考え、人と資源の両方の循環に資するプロジェクトとしてMEGURU STATION®(互助共助型の資源回収ステーション)を始動。2018年に宮城県南三陸町で実証実験を行って以来、奈良県生駒市や兵庫県神戸市、福岡県大刀洗町に展開しています。

MEGURU STATION®の設置数は小学校区に一つという仮説を置き、神戸市長田区では廃校を活用したコミュニティ施設「ふたば学舎」内に設置。小学校がなくなると、地域は不可逆的な退廃に進みますが、廃校を活用することでそれを食い止めることができるかもしれません。

長田区の拠点では、地域住民とともに「まちのアトリエ」というコンセプトをつくり、工作スペースを設けました。廃材を使った多世代交流型ワークショップを開催したり、廊下で走っている子どもたちとその場にいる高齢者の方々がいっしょに施設利用のルールを考えたりと、住民が当事者になれる「居場所」と「出番」をつくることで、よりよい場所にしようと取り組みが続いています。

POINT

だれかが面白そうなことを見付け共有できる偶然性と即興性が担保されている場所だからこそ、人が集まるコミュニティとして成立していきます。

▲大刀洗町のMEGURU STATION®オープニングイベント。資源回収ボックスを住民で協力して組み立てた。

▼神戸市ふたば学舎内MEGURU STATION®での工作ワークショップの様子

*1 中学校美術部などによる作品展「風土記の空」も2022年に14回目を迎えた。中学生が自ら展示を行う。
*2 そのほかにも作品には題名を付けてというお願いも。
「題名を付けるのは、自分自身の作品をつくるうえで非常に重要な部分です」(永山さん)。

「する・される」でなく、「そばにいるよ」という関係

兵庫県
神戸市

まちを知り、プロの技を知り、まちに戻す

ちびっこうべ

デザイン・クリエイティブセンター神戸(愛称:KIITO(キイト))は、あらゆる世代にクリエイティブ*3を提供するデザイン都市・神戸の拠点施設として2012年に開館。当初から子どもたちの創造性を育てる体験プログラム「ちびっこうべ」を開催しています。

「ちびっこうべ」は2年に一度、「子どものまちは、神戸の未来。」をスローガンに開催されています。その中で行われる「ユメミセワークショップ」では、子どもたちが、神戸市内に店を構えるシェフとメニューを考え、建築家やデザイナーと店舗をつくり、「ゆめのまち」をつくり上げていきます。チームの指揮を執るクリエイターらは「ちびっこうべ憲章」で子どもとの向き合い方の根本的なところを共有しつつ、それぞれがもつ考え方も尊重され、子どもやクリエイター同士とも刺激を与え合います。

2022年は8月からワークショップを始め、10月に集大成となる「ゆめのまち」の中に「ユメミセ」をオープンさせ披露。参加した子どもたちは「いろんな道具の使い方を教えてもらったけど、全部人間の知恵でできていてびっくりした」などプロから刺激を受け、「デザイナーチームでいっぱい絵をかくようになって、絵って意外と楽しいと思った」「お客をどう喜ばせようかなど、他人を思う力が少し強くなった」「自分には思いもしなかった考えがある子がいて面白かった」と自分の中に新しい発見があったようです。

過去の参加者が現在KIITOのボランティアスタッフになったり、料理に興味をもち料理人になったり。創造性を育む取り組みが、子どもたちのゆめを広げ、まちの未来にもつながっていきます。

▲「ちびっこうべ 2022」の様子。自分たちでつくり上げたお店で料理を提供する「ユメミセ」が立ち並ぶ「ゆめのまち」。お店もまちも子どもたちによって運営される。

ちびっこうべ憲章

1. 子どもたちの考えをなにより尊重し、みずから進んで取りくむための、ほんの手助けをする。
2. クリエイティブな活動をするいろいろな人との出会いを大切にし、その知識や技にじかに触れてもらう。
3. 「知る」「考える」「つくる」「伝える」という、じぶんで創造するための4つのプロセスを体験してもらう。
4. つくるという行為を通じて、子どもたちの好奇心や情熱をさらに引きだし、育てていく。
5. 年齢、性別の違う子どもたちとの関わりの中から、チームワークの大切さをしぜんと学んでもらう。

POINT

子どもの自主性を引き出すために距離感をもつこと。それは教える人・教わる人という関係ではなく、ひとつの目標を達成する仲間として対等に向き合うこと。目的のために自分になにができるか考えるようになり、自然と他者の意見に耳を傾け、子どもの学びに対する態度が開かれていきます。

◀ワークショップでプロのクリエイターとともに、互いに意見を出し合いお店のロゴや建物のデザインをつくっていく子どもたち。

写真提供:デザイン・クリエイティブセンター神戸　撮影:坂下丈太郎

*3 クリエイティブとは「知る、考える、つくる、伝える」というプロセスで育める力(「ちびっこうべ」Webサイトより引用)。子どもの創造的プログラムについては、神戸市教育委員会とともに公教育の中で「ちびっこうべ」のような活動を実施するプログラムのトライアルも進めている。

面白い大人がまちの魅力

広島県
広島市

楽しむ力は、巻き込む力

［東雲地区商店会］

東雲地区は、再開発事業によって人口が増える一方、2018年には商店会の会員数が29店舗とピーク時の5分の1近くまで減少。その年に商店会長に就任した加藤健太郎さんは「『楽しい』から始める」をモットーに、PTAで知り合った仲間を巻き込んで地域を盛り上げています。

2021年には東京オリンピックにあやかり「しののめさんフェスティバル〜ゆめリンピック」を開催。子どもたちからやってみたい競技を募集し、商店会で「どうすれば子どもが安全に楽しめるのか」と話し合い、大人が本気で工作をして「ボブスレーカーリング」「スリングボウル」など五つのゲームを制作。コロナ禍で家の中にこもっていた子どもたちが思い切り外で遊べる機会となりました。

ほかにも、緊急事態宣言で学校が休校になったとき「ファミリーサポート事業」を立ち上げて協力店で子どもを預かったり、商店会キャラクター「しののめさん」と朝のあいさつ運動をしたり。商店会の区域の学校は校長先生が替わっても地域との関わりを継続するそうです。

「自分たちが楽しんでいれば、『あそこは盛り上がっとる』ってよそから人が集まる。まちが楽しい場所であることが子どもの誇りになる。子どもたちが大人になってお店をやりたくなったとき、『東雲に店出さんでどうするん』って域に達したいですね」（加藤さん）。2023年1月現在、会員数は74店舗に。東雲地区商店会のゆめと楽しみはまだまだ広がります。

▲「ゆめリンピック」本番。多くの子どもたちが、青空の下で思い切り楽しんだ。

◀ゆめリンピックに向けて、大人が本気で図工に取り組む。

制作の様子はこちらでご覧いただけます。▶

▲会長自ら小学校の校門で登校中の児童に「ゆめリンピック」開催を呼びかけ。

POINT

大人が本気で楽しむことで、人やアイデアが集まり、まちが活気づく。そんな様子を肌で感じ、子どもはふるさとそして自分を誇りに思うようになります。

福岡県
宗像市

行政ー企業ー大学がつながる その中心に子どもがいる

［むなかた子ども大学］

さまざまな分野で活躍している大学や企業の方が講師となり、子どもたちに働くことや職業について考えてもらう「むなかた子ども大学」。子どもの健やかな成長が保証されるまちづくりを目指して2021年から開催され、2022年は29のコースが開設、約420人が参加しました。

運営や各コースのサポートには、市内にある福岡教育大学と日本赤十字九州国際看護大学の学生も関わるなど、いろいろな立場の人たちがつながって子どもたちを育てていこうとしています。

今回は我々日文も「編集者コース」の講座を受け持ち、編集者をはじめとする本づくりに関わるいろいろな職業の人になってもらい、会場であるGA（グローバルアリーナ）*4で見付けたもので一人一冊のフォトブックをつくる活動を提案しました。

大学生といっしょに歩いて写真を撮る中で、子どもたちはどんどん自分なりに面白いもの、楽しいものを見付けていきました。寄り添った大学生たちが子どもたちの視点をしっかりと受け止め見守ってくれたからこそ、安心して自分のいいなを見付けることができたのだと思います。できたフォトブックは一つとして同じものはなく、我々にGAの新しい魅力を教えてくれるものとなりました。

▲伊豆美沙子市長自らが学長となり、子どもたちに思いを語った。

▲「編集者コース」でつくられたフォトブック。9人の参加者それぞれの視点でGAが切り取られた。

撮影：濱田陽守

POINT

いろいろな大人に触れることは、子どもたちにとってとても大切な時間。面白い大人がたくさんいることを知る、それ自体が子どもたちにとって大切なキャリア教育なのかもしれません。

▲学生たちが寄り添うことで子どもたちは安心感をもって自分のいいなを探していく。

*4 株式会社サニックスの創業者である宗政伸一が私費で「青少年の育成に貢献できるものを」と設立した施設。グローバル、にはさまざまな人の交流をという願いがこめられている。 https://global-arena.org/

ワクワクを循環させる

東京都
杉並区

アイデアとイメージが混ざり合い響き合う

［阿佐谷ジャズストリート］

「阿佐谷をジャズで明るく元気なまちに」を合言葉に1995年に始まった「阿佐谷ジャズストリート」。運営やボランティアも地域の人たちが行う、まさに地元のイベントです。

そんな地域のイベントを盛り上げようと、開催の少し前から、近隣の小・中学校の子どもたちが表した作品が商店街に掲げられています。

杉並区立杉並第二小学校では、ジャズストリートに出演するミュージシャンを招き、実際の演奏を聞いてイメージを広げながら絵に表す活動をしてきました。単に下がきをして色を塗るだけでなく、一人ひとりが思い付いたことを加えながら表す様子はまさにジャズのセッションのように即興的です。それは「阿佐谷ジャズストリート」というイベントの成り立ちや運営にも通じるものかもしれません。互いのアイデアを認め合いながら、みんなでよりよいものをつくっていくということを、子どもたちは経験しているのではないでしょうか。完成した作品は、最初思っていたものとは違うかもしれませんが、思っていたよりも「いいな」と感じられるものになったはずです。

この活動を通して、子どもたちは「阿佐谷ジャズストリート」を意識し、そのイベントに関わる多くの

（次ページへつづく）

▲みんなのアイデアとイメージが混ざり合っていく。

▶ジャズアート展
パールセンター商店街

人々、さらには自分たちの過ごすまちについて考えるきっかけにもなっているように感じます。

子どもたちのアイデアが混ざり合った作品に見守られながら、2022年もたくさんの人が集い、ジャズの響きに酔いしれました。

▲ミュージシャンの演奏を聞きイメージを広げていく。

撮影：山下暢之

POINT

みんなのアイデアが混ざり合い一枚の絵になっていく経験は、対話による創発のレッスンかもしれません。それがまちに飾られることは、子どもたちにとっても誇らしい経験ではないでしょうか。

大阪府
東大阪市

「知ってもらう」から始まるまちづくり

「こーばへ行こう!」

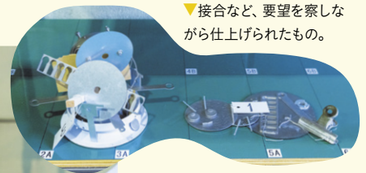
東大阪市には、6000近い町工場（まちこうば）がひしめいています。その多くは、生活の中で触れているけれども、なかなか目につかない部品をつくる小さな工場です。

盛光SCM社長の草場寛子さんは、そんな工場の魅力を知ってもらおうとワークショップやガイドツアーを行う「こーばへ行こう!」を4年前から始め、2021年は19社、2022年は24社が参加するイベントへと育てています*5。「工場は関係者以外立ち入り禁止だが、子どもたちも業界の未来を支える関係者。プロ野球ですらファンミーティングをしている。製造業も技術継承をしていくにはファンを増やさないといけない」と草場さん。

もともと寡黙な方の多い職人のみなさんも、年々積極的にアイデアを出し、来場者に関わって、盛り上げてくれるようになりました。また、参加した学生がその後就職してくれるというようなこともありました。

2022年は美術家の山添joseph勇さんの力を借り「ちょこっと職人」というブースを設けました。参加する各工場から出た廃材を並べておき、子どもたちが見て、選び、自由につくったものにメモを添えて職人さんに預け、要望を察しながら職人さんが仕上げ、工場に取りに来てもらうという取り組みで、交流の機会を増やすとともに、子どもたちの「つくる気持ちをつくる」ことができればと考えています。

まちをつくるのは住民だと語る草場さんは、このイベントに商店や地域の人、大学も巻き込み、多様な人が行き交う機会にしたいと語ってくださいました*6。



▼接合など、要望を察しながら仕上げられたもの。

◀いつもは使わない材料が心をくすぐる。

▶職人の作業をじっと見守る子ども。

POINT

ものづくりが互いの距離を縮め、子どもにも大人にもワクワクを生み出しています。互いの顔が見えるコミュニケーションが、まちの未来をつくっていきます。

◀イベント参加のため朝から多くの人が列をなした。

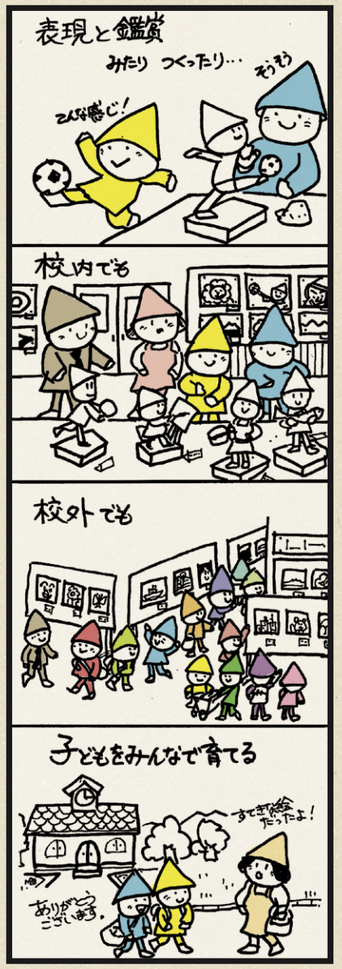
撮影：山本顕史

*5 もともとは廃業して工場の隣に住宅ができたことによる騒音問題を解決するために、壁を厚くするのではなく、互いの顔を見えるようにしてはどうか、というところから始まったという。
*6「工場の五毛作（ものをつくる場、技術を魅せる場、交流の場、教育の場、ものを売る場）をねらっている」とも語ってくださった。

ABC PICK UP

4コマ漫画で、子どもや図工のことを学べるABCシリーズ。
ここでは、同シリーズから毎号のテーマに合わせた内容を
選んでご紹介します。

今回は「新・図工のABC」p.51をピックアップ！



広げよう鑑賞の場

子どもの鑑賞活動は、授業だけに留まりません。通学路でも、家庭でも、あらゆる場で、あらゆるものが、鑑賞の対象になると言えるでしょう。

展示に関しては、子どもの絵や立体、工作の作品などを校内だけでなく地域にある施設などに展示することは子どもの喜びにもつながります。

地域の人々にとっては、学校でどのような教育活動が行われているかを知る機会になります。学校内に展示してある作品を地域の人が鑑賞できる環境をつくることも大切です。

これは学校でどんな教育が行われているかを発信する「社会に開かれた教育課程」の体現と言えるでしょう。また、一つ一つの作品から子ども一人ひとりの資質・能力の表れを見ることができます。「へえー。近所のあの子、こんな素敵な絵をかくのね」「子どもの作品をみると、こちらまでうれしくなるよ」など、地域の人の声が聞こえてきそうです。

※このコーナーは、ABCシリーズからピックアップしたページを基に、再編集して掲載しています。

ABCシリーズのラインナップ

ABCシリーズは公式Webサイトで全編をお読みいただけます。
また、冊子をお送りすることもできます。

著者紹介
阿部宏行（あべ ひろゆき）

1954年生まれ。札幌大学女子短期大学部こども学科教授。中央教育審議会 初等中等教育分科会教育課程部会 幼児教育部会委員、同芸術ワーキンググループ委員（平成29年）、文部科学省「学習指導要領等の改善に係る検討に必要な専門的作業等協力者主査（小学校図画工作）」（平成29年）などを歴任。北海道教育大学岩見沢校教授を経て現職。

小・中・高を通して「図画工作・美術」の教科書をつくっているのは、日文だけ。これからも「図画工作・美術」を応援します。

小学校図画工作科教科書

中学校美術科教科書

高等学校芸術科美術教科書

令和３年度版中学校美術の教科書、どう使う？

村上センセイの

教科書利用のススメ 第7回

教科書の著者である村上尚徳先生と全国の先生が、令和３年度から使用されている教科書の題材をもとに、どんな授業展開ができるかをご紹介するコーナー。
生徒の興味を引き出し、新たな気付きや感動に導くアプローチなど、指導のヒントが満載です。

美術1 P.12-13 感じ取ったことをスケッチに 見つめると見えてくるもの

［学びの目標］

- 形や色彩，明暗，質感などに着目し，特徴，印象，美しさをとらえ，線の強さや水加減などを工夫して表す。
- 身近なものの特徴や美しさなどをもとに，形や色彩，質感などの工夫を考え，構想を練ったり鑑賞したりする。
- 身近なものの特徴や美しさなどをとらえて表すことに関心を持ち，意欲的に取り組む。

造形的な視点
つやつやした感じやかたさなどは，どこから感じるのだろうか。

準備物
- 葉っぱ
- 画用紙　・色鉛筆　・消しゴム
- 視聴覚機器（プロジェクターなど）

造形的な見方を豊かにする視点や、技能に関する目標　発想や構想、鑑賞に関する目標　主体的に学習に取り組むための目標

造形的な視点　題材ごとに掲載している造形的な視点は、指している図版に対して、全体の感じからの印象や気づいてほしいことを示しています。

授業における学習の「核」とは何か、2つのポイントを語っていただきました。

ポイント① 葉っぱの「色」をよく観察してみる

村上 教科書には愛用しているグローブや光沢のあるグラスなどの例もありますが、今回のように葉っぱの色に絞って特徴を捉えさせる授業は、取り組みやすくなりますね。

伊藤 そうなんです。小さな画用紙で実物を隣に並べて描けるのもポイントです。小学校でも高学年になると作品を見る目が育ちます。理解力も高まり、理想は高くなっているのに技術が追いつかず、描きたいものと描けるものとの差に自信をなくしてしまう子は意外と多いですね。今回の授業が、そうしたギャップを埋められる内容になるとよいと思います。

村上 同じ色でも、角度によって見え方が違ったり、強弱があります。そうした違いに気付き、意識して描くことで、小学校のときとは全く違う表現ができるようになる。表現することに対しての自信や喜びが、そこに生まれてきますね。

伊藤亜希子先生（いとうあきこ） 熊本県 熊本市立京陵中学校教諭
熊本県出身。高等学校での非常勤講師を経て中学校美術教諭になり、21年目。熊本県図画工作・美術教育研究会研究局長。熊本県の美術協会や美術家連盟などにも所属し、制作活動も行っている。

※掲載している教科書は令和3年（2021年）度版 中学校美術科教科書です。

ねらい
試行錯誤を通して色に親しみ、理解を深める

導入
色鉛筆での色の重ね方を実演してみせる

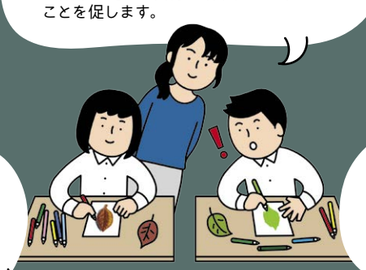
画用紙の上に葉っぱを置き、その隣に実物大で１cm² ほど色を塗る様子を投影機で見せる。色鉛筆を手に「何色を使う？」と問いかけ、「緑」「紫」「オレンジ」など生徒たちが感じた色を発言させて色を塗り、重ねることでの色の変化と、よく観察すると様々な色が見付けられることに気付かせる。

展開
01 葉っぱを実物大で本物そっくりの色で描いてみる

下描きでつまずいているな……
「葉っぱの形をなぞってもいいよ」と声掛け。ハードルを下げるとともに、形ではなく色に集中させます。

「何色に塗ったらいい？」と聞いてくる
「何色が見える？」と逆に問い返して、自分で観察し考え、自分の作品として仕上げることを促します。

集中力が切れてきたかも……
集中力の切れる生徒が出てき始めたら、他の生徒の作品を見て回る鑑賞タイムを挟みます。



ツヤや影の表現をしている生徒がいる
よい気付きのある作品は投影機で映して、他の生徒にも共有します。消しゴムでぼかすなど、具体的なコツを助言してもよいです。

思い込みで色を塗っているみたい……
しっかりと手元で実物の葉っぱと見比べて、見えている色になっているか、確認の声掛けをします。

02 最後に黒板にみんなの作品を貼りだして相互鑑賞

離れて見てみるとまた違った印象に。「意外と上手に描けてる！」と自信につながることも。

指導案はコチラ

ポイント② 試行錯誤をのちの作品づくりに生かす

伊藤 最近の生徒は最短距離を目指す傾向が強いのか「何色で塗ればいいの？」とすぐに答えを求めてくる子も多いです。そんなときは「正解はないよ」と。自分で試行錯誤して過程を楽しむのが美術だよと、伝えるようにしています。

村上 その際、そのもののどういうところを見るとよいか、気付くように指導することが大切ですね。導入の実演のほか、タッチの違うスケッチを何枚か見せて比較するのもよい方法。色を塗っていない白い紙の部分はつやに見えるとか、意図に応じた表現の違いに気付きやすいでしょう。

伊藤 あと、影を勢いで描いている生徒には「影にも柔らかい部分と強い部分があるから、本物をよく見て」と観察を促すことが大事ですね。自分なりの試行錯誤を通し、なんでこうしたのか、根拠をもてるようになってほしいです。

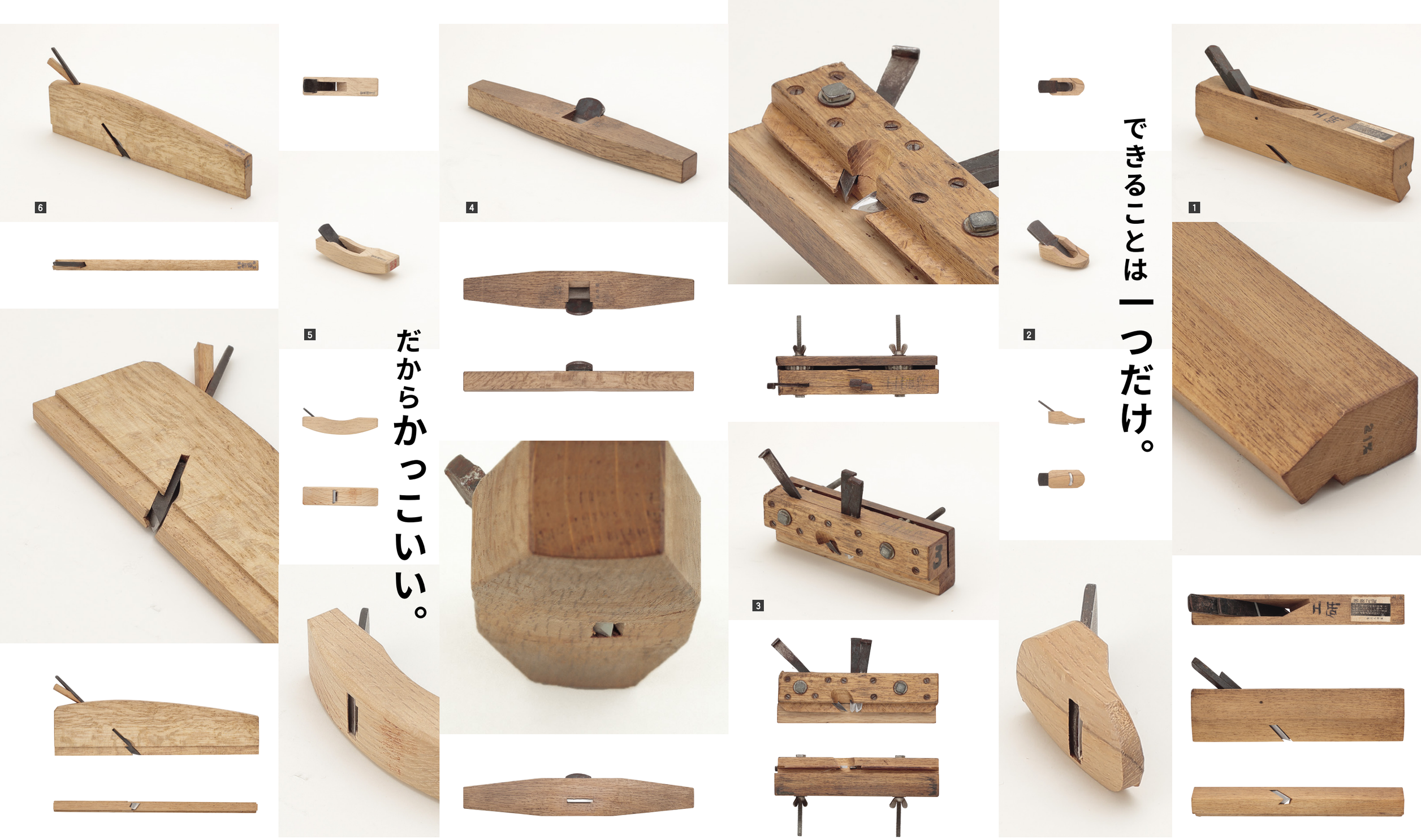
村上 相互鑑賞でも、意識して描いたところを振り返りできるのがいいですね。今回学んだ技能がのちに、自分で主題を発想・構想し、描くという一連の題材で生きてくると理想的ですね(★1)。

村上尚徳（むらかみひさのり） IPU・環太平洋大学副学長 次世代教育学部教授
岡山県出身。岡山市立中学校教諭、岡山県教育庁指導課指導主事を経て、文部科学省教科調査官、及び国立教育政策研究所教育課程調査官に。平成20年の中学校美術、高等学校芸術（美術・工芸）の学習指導要領改訂に携わり、2011年より現職。

（★1）学習指導要領解説 p.119 では、指導の効果を高めるために、「A 表現」(1) のア及びイの発想や構想に関する指導内容や、(2) のア及びイの技能に関する指導内容のみを比較的少ない単位時間で単独に扱う題材の設定も考えられるとし、その際は他題材との関連や配当時間を検討し指導計画を作成することが重要としている。

できることは一つだけ。

だからかっこいい。



0　10cm　※スケールは切り抜きの画像のみに適用。

1 脇取鉋［25.3cm］敷居、鴨居の溝の脇を削る。線対称の形をした対になる鉋があり、二つ一組で使う。　**2** バイオリン鉋［5.4cm］底面が四方（前後左右）に曲面になっている。バイオリンなどの楽器制作をはじめ、細密な加工に使用。小さな鉋は豆鉋、指鉋、彫刻鉋とも呼ぶ。　**3** 機械作里鉋［19cm］木材の側面に沿わせて、天面に溝を切る。溝を切る鉋は名前に「作里」とつく。　**4** 南京鉋［27.6cm］椅子の脚など、丸棒を削り出す。自転車のハンドルのように両脇を持って使う。　**5** 極豆鉋 平反り［13.6cm］底面の形状の通り、曲がり具合がきつい曲面を削る。バイオリン鉋が四方に曲面になっているのに対し、こちらは二方（前後）のみ。　**6** 櫛型作里鉋［24.7cm］建具職人が引き戸の建て付けの際に戸首（鴨居と噛み合う）部分を削る。（［　］内は長辺の長さ）

形から用途を考えよう

「鉋」と聞いて思い浮かべる道具は、木材の表面を薄く削り、平らな面をつくることを目的として、それに見合った形をしています。ここに並んだ6つの道具もすべて鉋ですが、形は少しずつ異なり、つくり出せる形状に即した形になっています。それぞれの用途を、刃や台の形から考えてみましょう。

企画・編集：坂本のどか　撮影：大関雄次郎

まず見る

第三二回

生まれた面をみる

誰もが知っている作品や、初めて出会うもの。
いつもの見方はいったん忘れて、一緒に新しい見方を試してみましょう。
それまで見えなかった作品の一面が、見えてくるかもしれません。

手もとの辞書で「落書き」を調べてみると、「門・壁など、書いてはいけない場所にいたずら書きをすること。たわむれに書くこと」とあります。では「いたずら書き」はどう説明されているかというと、「遊び半分で書くこと」。したがって「落書き」とは、「いたずら書き」の意味に加えて、禁止や悪さを強調するために使う言葉ということでしょう。ついでにwikipediaの「落書き」の項目をのぞいてみたら、犯罪であることが前面に押し出されていて、なんだか空恐ろしい気がしました。

さて、右に引用した語釈にある「書いてはいけない場所」というのが面白いところです。書くことがもともと禁止されている場所というのは滅多にないはずで、往々にしてそれは、書かれるなどとは思われていなかった場所であり、書かれて初めて「いけない」ことが判明した場所なのではないでしょうか。まさか門や壁に書くなんて。そこが「書くことのできる」場所だったなんて。

ここにこそ、通常の絵や文字とは異なる落書きの落書きたるゆえんがあります。いわば、落書きとは面の発見である。落書きがあって初めて、書く（描く）ことのできる面に気付かされる。そこが潜在的なキャンヴァスであったことが判明する（誤解のないように一応書いておけば、ここでことさらに落書きを称揚しようというわけではありません）。

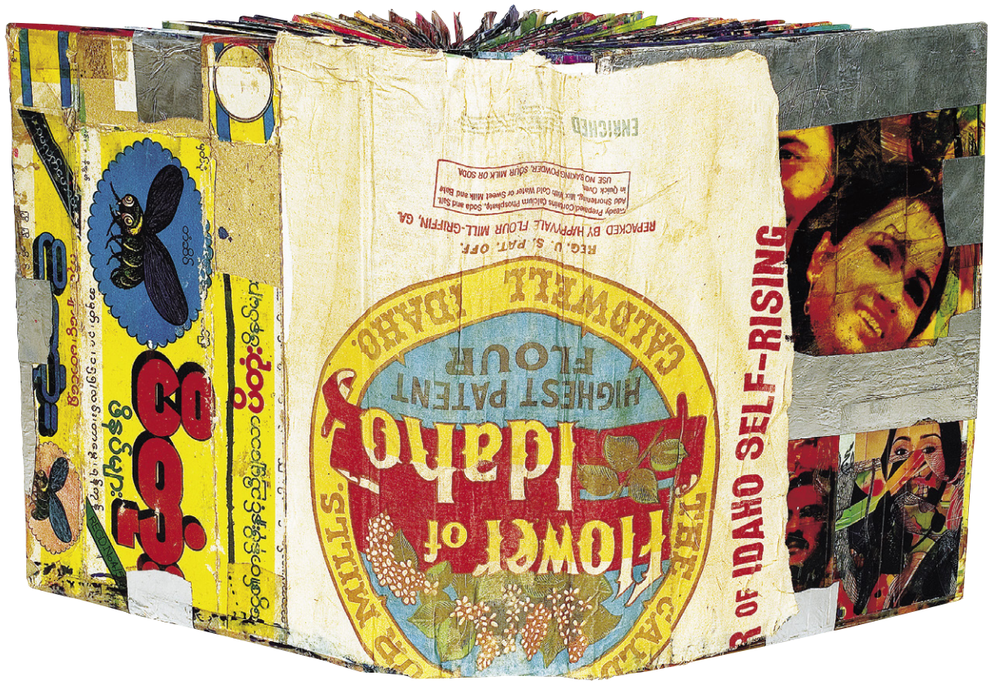
街中で見るいわゆるグラフィティには、よくぞそこに書こうと思ったものだと感心することがあります。容易に手が届かなかったり危険な場所だったりするものも驚きますが、特にハッとするのは、例えば窓枠と壁をまたがって書かれているようなタイプです。窓とか壁とかいう、あらかじめ与えられていた意味を無視して、誰も気付いていなかった新しい面が、そこに生まれている。

それは「書く」というより「貼る」感覚に近いかもしれません。じっさいに貼るタイプのグラフィティもよく見かけます。貼るという行為の根本的な機能、あるいは楽しみは、貼ることのできる場所を見つけだし、新しい面を創出することにあるように思われます。

窓、壁、シャッター、看板、といった既存の名前や役割を無視して、すべてを貼るための「地」と捉え、覆い、上書きしてしまう強引さ。そして面白さ。「書いてはいけない！」と最初に叫んだ人は、物質的に汚されたことを不愉快に思ったというより、そこにあったはずの名前や意味をないがしろにされたという概念的な事件にこそ憤慨したのではないでしょうか。

大竹伸朗は、そのような貼ることの力に賭けてきたアーティストです。ここに掲載している紙の塊のような「スクラップブック」は、彼が既成の本の上にコラージュと着色を重ねに重ね、いつしか常軌を逸した厚みになった作品。はじめは数センチだった本が、何十センチにも膨らんでいます。あなたは印刷物を、「貼れる」面として見てみたことがありますか。もう完成している本に、さらにもう一層を加えたいと思ったことがありますか。

ひとたび貼られた面は、また新たな面として見いだされ、その発見は無限に続いていきます。この世の中のあらゆるところで、あらゆる物体が地と図の地位を奪い合い、ひしめき合い、協調している。そんな風に世界を眺め返してみるのも一興です。



令和4年（2022年）度版 高等学校芸術科美術Ⅰ教科書「高校美術」 p.38掲載

スクラップブック#63

［34.2×27.2×16.1cm］2003.7.2-12.13
作家蔵
大竹伸朗（おおたけしんろう）［東京都・1955～］
Courtesy of Take Ninagawa, Tokyo

文
成相 肇 なりあい・はじめ
東京国立近代美術館主任研究員。
一九七九年生まれ。府中市美術館学芸員・東京ステーションギャラリー学芸員を経て、二〇二一年から現職。
主な企画展に「石子順造的世界」、「ディスカバー、ディスカバー・ジャパン」、「パロディ、二重の声」など。

〈今号のひと言〉

東京オリンピックが終わって一年以上が経とうというのに、開催を記念するバナーが街頭に取り残されているのを見つけました。周囲はすべて撤去済みで、たまたまそこだけ街路樹が覆いかぶさっていたために気付かれなかったのでしょう。このまま逃げおおせて、いっそ新しい観光名所にならないかと思っています。

東京国立近代美術館展覧会情報
「東京国立近代美術館七〇周年記念展 重要文化財の秘密」
（二〇二三年三月一七日～五月一四日）

文：群馬大学共同教育学部 准教授 市川寛也（いちかわ ひろや）

金ケ崎芸術大学校 城内農民芸術祭2022 ポスター［紙版画］

本作品については
図工のみかた 図工のあるまち第二七回
でも紹介しています。

夏休みの宿題と言えば、読書感想文や自由研究が定番ですが、ポスターもよくある課題の一つです。今回は、夏休みに行われたとあるワークショップの成果物を取り上げます。会場となったのは、岩手県の金ケ崎町にある一軒の古民家。生活そのものを芸術として実践するプロジェクトの一環として、秋に開催されるイベントのポスターを紙版画でつくりました。版画家とグラフィックデザイナーの二人が講師を務め、小学五年生二名と四年生一名が参加しました。

広報物としてのポスターは、少し先の未来を考えることから始まります。「家を舞台にした小さなお祭り」というテーマのもと、大学生も一緒になってイメージを膨らませていきました。秋という季節からお月見を連想したり、古い家にいそうなお化けを想像したり、突然の雷雨から雷様を登場させたり……思い思いの形を切り貼りしていきます。紙版画の特性を生かせば、庭で採取した植物をそのまま貼り付けることもできます。最後は全体のバランスを見ながら版の上に重ね合わせていきました。

完成した版を刷ってみると、バラバラだったパーツが不思議な統一感のある一枚の絵としてあらわれてきました。紙をめくってみるまで分からないのも版画の醍醐味です。小学生と大学生と専門家、それぞれの力を結集した作品は、その後、印刷されてまちなかに掲示されました。多くの人の目に触れてこそ、ポスターの本領発揮です。まちに開かれた「もうひとつの学校」の挑戦はこれからも続きます。

| 小 | 中 | 高 |

形 forme No.329-2023

日文教育資料［図画工作・美術］

令和5年（2023年）2月24日発行

編集・発行人 佐々木秀樹

発行所 日本文教出版株式会社
〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL：06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33620

日本文教出版 株式会社
https://www.nichibun-g.co.jp/

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171

東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938

東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1-13-18-7F・B
TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690